



# 伽藍の胸襟を開き いま地域の変化に寄り添う

## — 白州 自元寺 玄関唐破風移設 / 庫裏耐震改修工事 —

古くから甲州街道の宿場町として栄えた山梨県白州町の台ヶ原宿。自元寺はその賑わいを今に伝える歴史ある街並みの文化的な中心として長く地元へ寄り添い、時代に応じてその姿も大きく変えてきた。その様は仏教が担う地域の中での役割の変化に順応しながら、お寺が如何に人や地域の生と共にありうるかという葛藤と生存の軌跡のように見える。

いま、地域のコミュニティーをめぐる状況はかつてないほど大きく変化しようとしている。高齢化が進み世代間交流が求められる一方、歴史ある街並みや文化を求めて都会から若い世代の移住者も増えつつある。檀信徒のみならず地域のために、お寺にできることを住職並びに檀家で構成される建設委員会と協議を重ねてきた結果、住職家族の住まいである庫裏の耐震性能を高めた上で大きく地域に開き、次の3点を実現する。

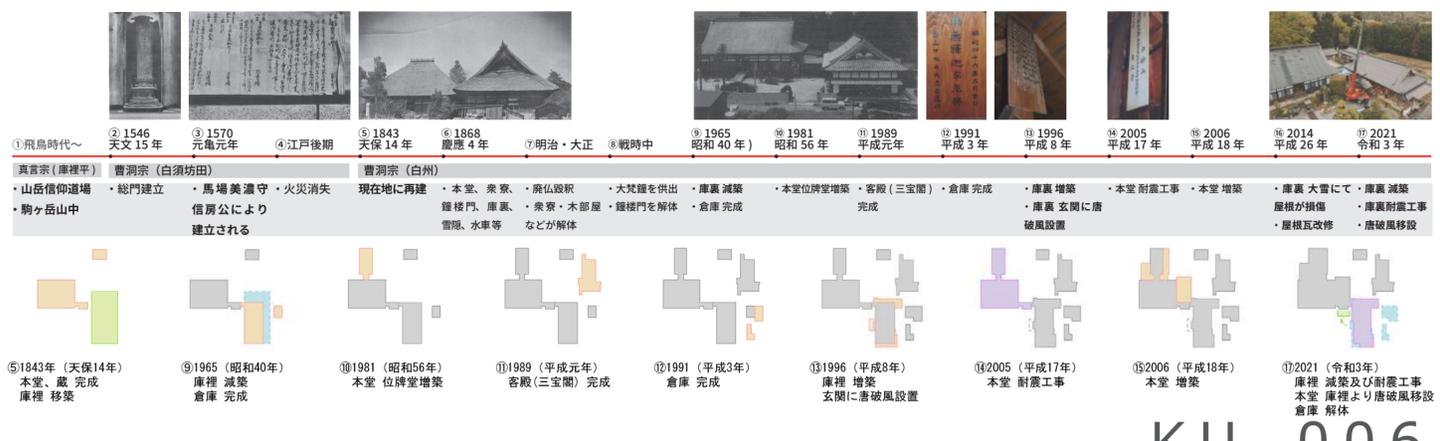
- ① 1代を超えた交流を促す
- ② 禅の文化を発信できる場を提供する
- ③ 本堂の格式を高める

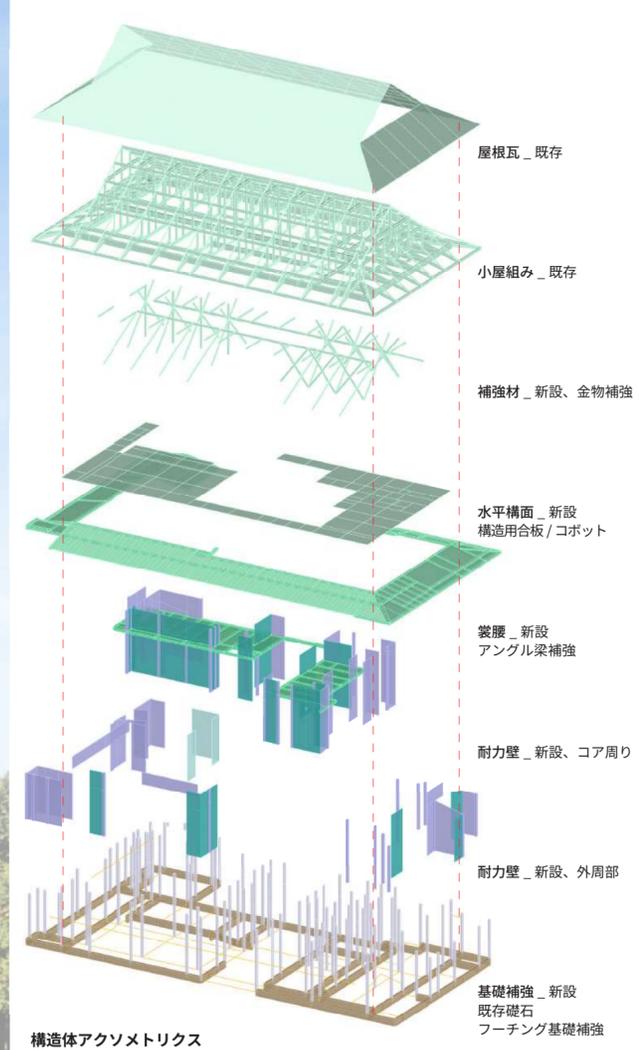
過去に増築された唐破風を本堂側の玄関に移設し本堂の格式を高め、対して庫裏は外壁を一部セットバックし庇（裳腰）を廻して地域の人を呼び込む舞台とする。法要の際には本堂と一体的に使われてきた既存の座敷は極力原型に近い形で残したうえで、隔（耐力壁コア）によって各種教室や体験活動など多様なアクティビティの器を設える。

古来お寺という場が本来的に持っている「地域と共に生きる」というあり様を「いま」に即して展開し、街に開き、建築空間として共有することは、変わろうとする地域の今の現れであり、同時に新しい街の遺伝子として未来へ引き継がれるべきものであると考える。



### □ 時代の流れと伽藍配置の変遷





構造体アクセシメトリクス

- 屋根瓦\_既存
- 小屋組み\_既存
- 補強材\_新設、金物補強
- 水平構面\_新設  
構造用合板/コボット
- 裳腰\_新設  
アングル梁補強
- 耐力壁\_新設、コア周り
- 耐力壁\_新設、外周部
- 基礎補強\_新設  
既存礎石  
フーチング基礎補強

□構造計画について

- 補強は現行の法規を満たすレベルの強度を許容応力度計算に基づいて確保する
- コア型の耐力壁配置を基本とし必要に応じて外周部に耐力壁を配置する
- 基礎は必要に応じて、既存の躯体に沿うように新設する
- 水平力のみでなく、鉛直力に対しても各部材を再設計する
- 新設の底については必要に応じて鉄骨梁の補強を入れる



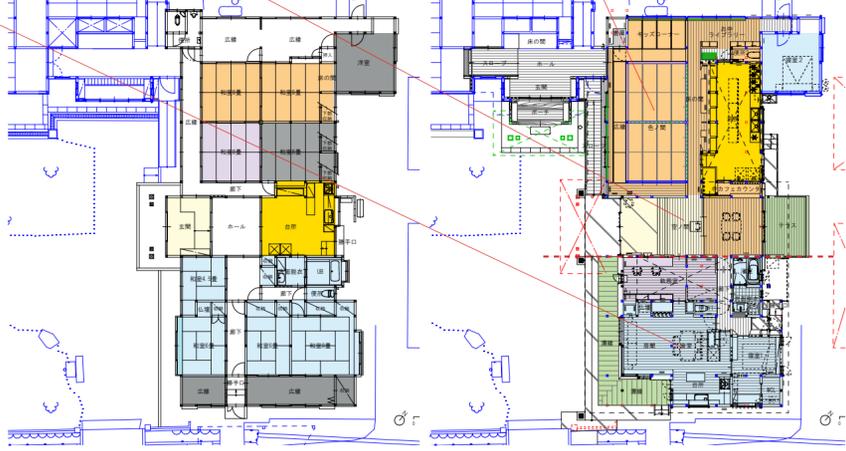
内観イメージ\_住職家族住居居間  
住職家族の生活空間、裳腰と溝縁によってアプローチ空間と距離をとる。欄間から間接光を確保し欄間からは引込障子でプライバシーを確保する。



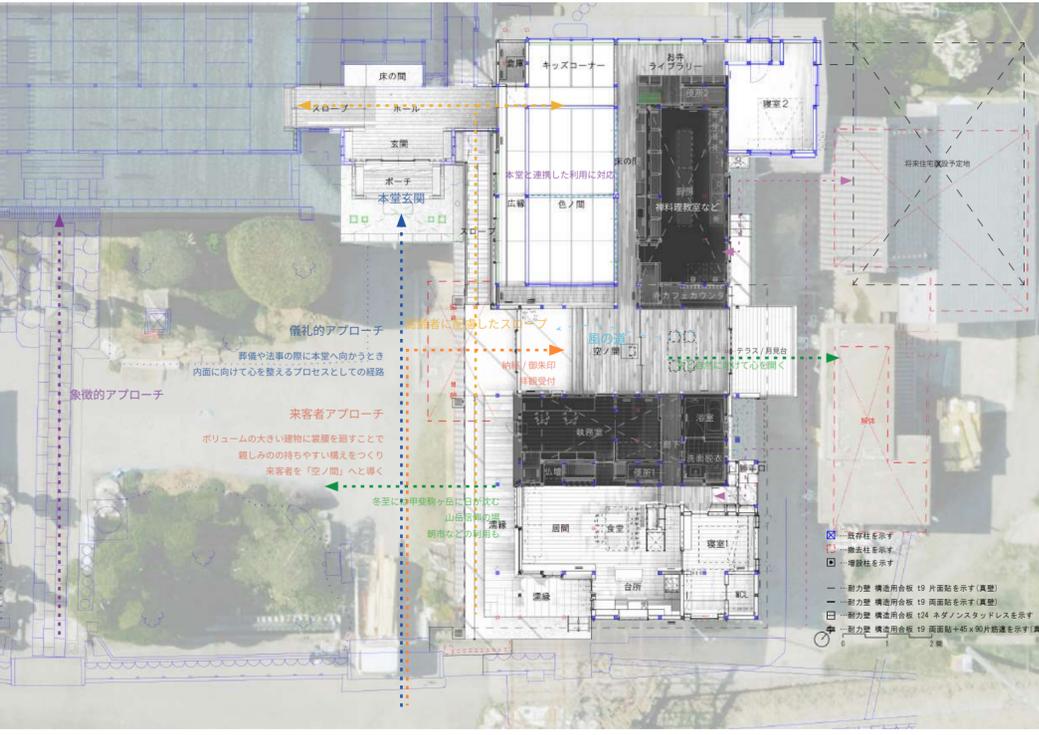
内観イメージ\_空の間  
既存では台所であった土間があった庫裏の中央を吹抜け空間とし風や自然光、月夜の移ろいを感じられる開かれた場所とした。多目的な用途の器。



内観イメージ\_色の間  
本堂と隣接し元々法事などで連携して用いられること多かった座敷は極力もとの状態を残し、禪料理の体験ができる台所との隔てを新たに床の間とした。



既存建物平面 → 計画平面\_用途ダイアグラム



計画平面図\_NS



軸組み検討模型\_1:50

□動線計画について

- 過去に増築された庫裏玄関の唐破風を本堂玄関に移設、本堂の厳粛な格式を高める。
- 庫裏には裳腰を廻し、建物の威圧感を軽減し親しみやすい構えを設え  
来客者を「空ノ間」に導く。
- 裳腰に沿って外壁を一部セットバックし、甲斐駒ヶ岳を眺めたり少し腰かけて  
歓談したり、朝市の舞台としても使える多目的の濡れ縁を設け、多様な交流を促す
- 庇の下に本堂まで通じるスロープを設け高齢者や車いす利用者も訪れやすいお寺とする

□耐震計画と平面計画について

- 現行法規を満たすレベルの耐震性能を実現しながら周囲に向けて開かれた空間性を実現させるため、耐力壁をコア状に集約して分散配置し、その余白のスペースに自然環境や禅の文化を体験できる空間を設えた。
- コアを境に住職のプライベートエリアと明快に分離。
- 開かれた庫裏は、新たな出会い、人や心のつながりを感じながら自己を見つめなおす場。